



武州みだけ

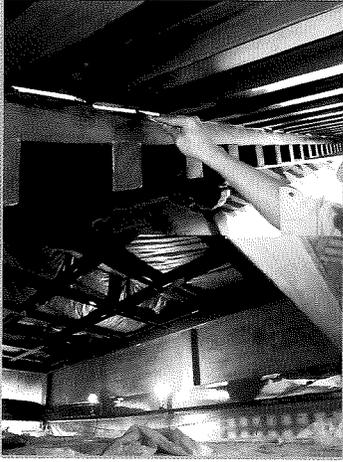
第四十五号

# 式年大祭 記念事業経過報告

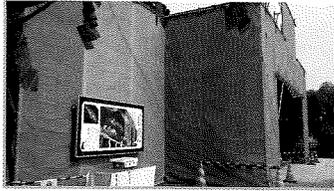
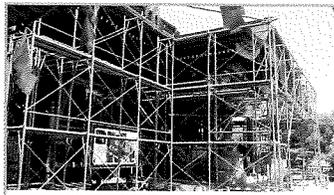
平成二十九年酉年式年大祭に向け、今年七月より漆塗り替え工事が始まりました。現在、計画事業も順調に進捗致しております。来年秋頃には完成の予定です。

六月の足場工事より社殿は完全に覆われており、境内が狭くなっております。御参拝の皆様にはご不便とご迷惑をお掛け致しますがご理解を戴き、今後も皆様より賜りましたご厚情を糧にこの記念事業の完成に向け、鋭意努力をして参る所存でございます。

また引き続き記念事業資金のお願いをすることでございます。何卒宜しくご高配賜りますようお願い申し上げます。



傷を生漆のバテで埋める作業の後、下塗りを重ね、仕上げ漆を塗り重ねていきます。



社殿は覆い屋で隠されていますが、通常通りご参拝いただけます。



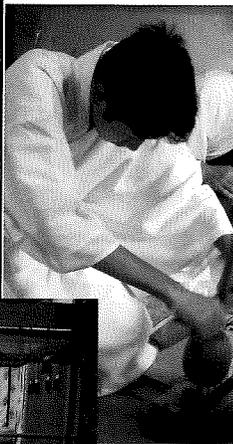
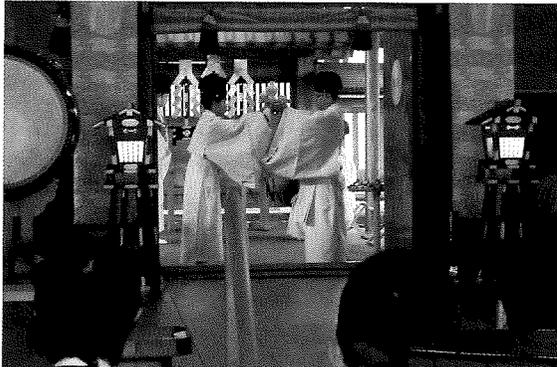
古い漆を綺麗に洗い落とす作業から始められます。

# 傳法

今年の夏、四名の方が傳法を終了しました。傳法とは、当社に御師（神職）として奉仕させて頂く許可を受ける為の伝統行事です。各社家を受け継ぐ者が俗界を離れ神社に籠もります。一週間絶やさぬご神火を熾すことから始められ、毎日潔斎をし、歴史・作法・祝詞など神職としての嗜み全てが伝授されるのです。

いつもの生活環境を断ち、節制した生活を送ることは若い者達にはとても大変なことです。今回四名ともあつて、仲間同士励まし合いながら大神様のご加護を戴いて目出度く無事終了することが出来ました。ここで傳法の様子を少しご紹介いたします。

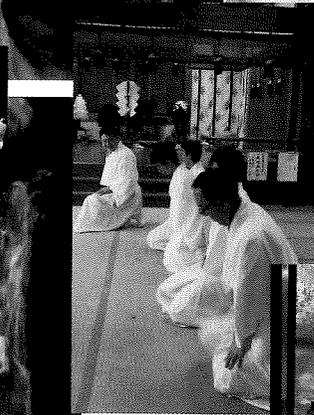
ほうこくさい  
奉告祭



熾し  
火おこ



朝夕の禊  
みそぎ  
(潔斎)



作法



次号は、傳法者四名をご紹介いたします。



式年大祭(二万円以上・敬称略)

平成二十七年三月一日

平成二十七年八月三十一日

五百万円以上

秦野市 大津 昇

百万円以上

山梨県市川三郷町 有限会社丸井紙店  
青梅市 武州工業株式会社  
小平市 立川ウエ  
新座市 野島光伸

三十万円以上

青梅市 野崎啓太郎  
さいたま市浦和区 J.A.埼玉県中央会・連合会  
横浜市中区 J.A.神奈川県中央会・連合会  
青梅市 株式会社若林商店  
品川区 駒鳥売店  
品川区 日本書鏡院 長谷川耕生

二十万円以上

練馬区 向山講 林道隆

十万円以上

ふじみ野市 苗間講中  
練馬区 豊田 清  
入間市 平塚茂・胡子  
八王子市 八木岡照義  
新座市 八軒講中  
西多摩郡瑞穂町 村野英夫  
あきる野市 秋間荘一  
春日部市 土屋康晴・裕子・昌範・実那  
町田市 尻無演竹翠  
青梅市 鞆矢栄三  
青梅市 高名都雄  
青梅市 天野光紘  
青梅市 久保田直行  
青梅市 馬場満  
青梅市 片柳光雄  
川越市 鴨田講中  
福島県双葉郡川内村 久保田ミヨ子  
五万円以上  
西多摩郡奥多摩町 大久保雄二

三万円以上

比企郡川島町 表講中  
川越市 岸野晴一  
西多摩郡日の出町 谷治博史  
松戸市 戸田栄造・幸子  
青梅市 中村直子  
西多摩郡瑞穂町 大熊慶  
西多摩郡日の出町 木住野 忠  
世田谷区 尾澤正和  
羽村市 田村弥生  
西多摩郡瑞穂町 吉岡 功  
朝霞市 内田栄二  
西東京市 長谷川 正

一万円以上

加須市 旗井講中 旗井神社氏子総代会  
所沢市 神山友和  
所沢市 神山茂子  
青梅市 森田朱香子  
朝霞市 鈴木泰高  
八王子市 西野貢右  
練馬区 中井川 萬嗣  
武蔵村山市 (株)サンペー 進藤喜一  
練馬区 大泉幸西講中 加藤友久  
町田市 金子初美  
横濱市磯子区 市川良子  
青梅市 林三喜  
あきる野市 小野源一  
さいたま市桜区 千葉善邦  
羽村市 渡邊真理  
富士見市 鶴馬紺屋 横田 登  
草加市 田口つばさ  
秦野市 石田正司  
川口市 濱中満江  
西多摩郡日の出町 森田 豊  
杉並区 藤原 満

奉納・営繕資金(二万円以上・敬称略)

平成二十七年三月一日

平成二十七年八月三十一日

三万円以上

狭山市 松本和治  
岩手県大船渡市 及川一司  
青梅市 澤本晃利  
文京区 半澤吉男  
愛知県豊田市 嶋田浩典  
さいたま市浦和区 宮井 章  
江戸川区 梅原嶽三  
青梅市 SOROMI 堀口ひとみ  
さいたま市緑区 戸谷晟司  
昭島市 宮北勝利

一万円以上

小金井市 中崎正巳  
目黒区 三田篤志  
清瀬市 小原正之  
青梅市 川杉純一  
上尾市 株式会社 栗原寛明  
狭山市 松本和治  
岩手県大船渡市 及川一司  
青梅市 澤本晃利  
文京区 半澤吉男  
愛知県豊田市 嶋田浩典  
さいたま市浦和区 宮井 章  
江戸川区 梅原嶽三  
青梅市 SOROMI 堀口ひとみ  
さいたま市緑区 戸谷晟司  
昭島市 宮北勝利  
板橋区 上板橋桜川敬神講  
葛飾区 葛島 馨  
富士見市 萩元 實  
東久留米市 中秀男  
青梅市 瀧 柱郎  
越谷市 中島昇一  
秩父郡皆野町 金子千侍  
日野市 白根眞澄  
武蔵村山市 波多野 稔  
草加市 藤本留美子  
青梅市 (株)成康工務店 加藤 論  
青梅市 (株)向山食品  
青梅市 (株)榎澤商店  
武蔵作酒店 武藤 一由  
青梅市 大久保貴惟  
八木岡照義  
所沢市 御嶽神社 参詣会  
川崎市 武笠一男  
葛飾区 石井 慶子  
青梅市 成瀬康郎  
横濱市神奈川区 成瀬太一  
小金井市 阪本 林蔵

太々神楽奏上

近年太々神楽奏上が少なくなつて  
おります。太々神楽はどなたでも  
ご奏上頂けますので、皆様のお申込  
をお待ち申し上げます。  
平成二十七年二月一日  
平成二十七年八月三十一日

狭山市 笹井講中  
新座市 大和田講中  
東久留米市 小山講中  
川崎市 稲田堤講中  
川崎市 馬絹講中  
秦野市 秦野太々講  
渋谷区 明治神宮至誠館道場  
横浜市 菅田南町講中  
杉並区 浜田山講中  
大田区 六郷講中  
川崎市 坂戸講中  
川越市 中福講中  
川崎市 市ノ坪御嶽講中

石段奉納

この程篤志家様より石段奉納を  
賜り、随身門上の階段を修理する  
こととなりました。平成九年から  
始めた境内石段整備ですが、崇敬  
者様の篤い御信心と御奇進を賜り、  
お陰様であと僅かで終了するところ  
となりました。皆様のご厚情に  
感謝申し上げます。

三万円以上  
青梅市 増田高一・正子  
青梅市 今井西組御嶽講  
J.A.東京中央会 須藤正敏

# ●●講中を訪ねて●●

## 東村山市 多摩湖町御嶽講

講元 清水 幸夫

所在地 東京都東村山市

講員数 二十六名

主幹宮司 馬場 克巳



私達の町は東村山市の北西部にあり、西は多摩湖（村山貯水池）のとなり、北は西武遊園地の南側にあり、面積一キロ平米以下の狭いところです。昔は宅部（やけべ）と言い、下宅部遺跡から縄文時代の土器等が発見されました。

さて御嶽講ですが、江戸時代に東馬場御師の先祖が私の五代前の武兵衛を訪ね、講を作って代々私の家が講元を務めております。

私が子供の頃は、東馬場御師のヒゲのおじいさん（美作氏）が講員の家を回って私の家に一泊していました。平成になりだんだんと講員が減り、当初は四年に一度の代参でしたが、三年になり、今は二年に一度の代参となっております。現在二十六名の講員のため、二年後には会費を見直し全員で代参しようとの意見も出ています。

また平成二十年より、それまでの電車からマイクロバスに変更し、大変楽になっております。代参から帰ってからは、翌日の午後七時より総会、お日待ちを全員で行なっておりますが、私の父の時代までは自宅に講員を集め夜遅くまで宴会をしていました。今は集会所を使用するため十時にお開きとなっております。大口眞神は地元氷川神社の横にある祠と私の家にある御嶽神社に祀っております。辻札も平成十七年までは二本立てておりました。が今はやめました。

御嶽講は農家を中心に始まりました。現在農家や商店が減り、講員の減少に悩んでおりますが、現在の方々には続けていきたいとのこと、色々工夫しながら続けたいと思っております。

終わりに御嶽神社の益々のご隆盛と、東馬場家のご繁栄をお祈り申し上げます。

## 講と私

御師 高名 都雄

猛暑から解放され、夜毎かんとんの虫の音が秋の訪れを告げるころとなりました。

人生永くもありまた短きもの、若くして御師を拝し既に半世紀が過ぎ去りました。この間講中信仰の皆さんと三代に涉り人生感を学ぶことが出来たこと、只感謝いたします。

さて今日は私が御師として初めて講中にお伺いした、思い出の信仰心厚い講中をご紹介します。

さいたま市の西に位置する字清河寺、古くは寺街として栄えたと聞きおよんでおります。三代に亘り清河寺御嶽講の講元を継承いただく見村家、現在は三代目の温厚な人柄の喜明氏のもと約四十名の講員が結束され、十年毎と太々神楽を奉納し講中繁栄と安全を祈願されております。

また、清河寺の集落には古くからお囃子が伝承され、その名も高く、武蔵御嶽神社の行事等に度々ご奉納をいただいております。平成二十九年酉年式年大祭にもご奉納いただければと考えております。

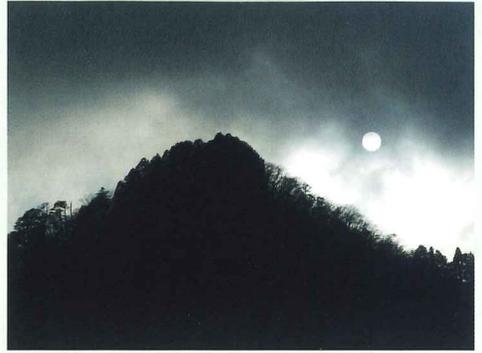
良き関係にあります講中が未永く継続されることを願い、永年の付合、只々感謝いたしますと共に、多くの講中の繁栄と安全を祈願いたしております。



講中名 清河寺御嶽講  
所在地 埼玉県さいたま市  
講員数 約四十名

# オオカミの山を撮り続けること

フォトグラファー 鶴巻育子



2012年の夏、雑誌の撮影依頼がきっかけで初めて御岳山に登りました。予習として、取材同行した小倉美恵子さんの「オオカミの護符」を読んでいたのですが、オオカミ信仰、山の歴史などとても興味が湧いていました。しかし、都心の暮らしが好きで、大の虫嫌いの私にとってそれは、実は、正直気が重い仕事だったのです。そんな気持ちでケーブルカーを降りて神社へ向かう足取りも重かったのを今でも覚えています。

二匹のオオカミ…紀元前からの信仰…。撮影をしながら、宮司さんや神職の方々の言葉に耳を傾けていると、徐々にワクワクした気持ちが膨らみ、もっと知りたいという思いでいっぱいになり取材が終わる頃には、既に御岳山の虜になっていたのかも知れません。

その日は快晴で、都心の夜景がくつきりと現れていました。東京が江戸だったころは、こんなに明るい夜景は存在しなかったでしょうが、昔の人も、この同じ場所で江戸の街を眺めていたのだろうと想像したときは、とても不思議な感覚を覚えました。

一気に御岳山の虜になってしまった私は、その一週間後、自然とこの山に足が向かっていたのです。それからの一年間、仕事よりも御岳山の祭事を優先に数十回と足を運び写真を撮り続けました。そして、一年後の2013年の秋に「東京 オオカミの山」というタイトルで写真展を開催するまでとなったわけです。三年が経った今では、大事に守られている信仰や山の人々の暮らしを撮り続けることが使命のようにも感じています。私が撮影した写真のちに、貴重な記録、ある人にとっては大切な思い出となったら、とても嬉しいと思いつつシャッターを切っています。それを快く迎え入れてくださる山の方々と神様に感謝します。



写真右上  
長尾平から見た男具那の峰。黒い雲が立ち込め、太陽が月のように見えた瞬間。

写真左  
1月3日に行われた大口真神社祭。男具那社へ遙拝している。



Tsurumaki Ikuko

東京都葛飾区生まれ。広告代理店に勤めながら写真を学び、ブライダル写真事務所、カメラマンアシストを経て、写真家として独立。カタログや雑誌の撮影、写真雑誌の執筆のほか、写真講師やセミナーなども多数行っている。

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ 25

## 国宝

## 円文螺鈿鏡鞍の

## 杏葉形宝珠透文鉄轡

日本風俗史学会 前青梅市文化財保護審議会会長

齋藤 愼一

円文螺鈿鞍は、大和鞍として居木幅広く、海・磯の較差、前輪の肩の張った山形、後輪腰のふくらみに中世初期の重厚な造形が指摘される軍陣所用の鞍です。〔日本馬具大鑑3〕

舌長鐙等付属具も下鞍（鞆）以外は、ほぼ残存し、皆具に近い稀有な遺例です。重厚さは、付属の杏葉形宝珠透文鉄轡にも指摘できます。

この轡（銜）は、年代的には、鎌倉後期に下降すると考えますが、中世轡の基本意匠である杏葉形をきちんと踏襲し、鍛造の仕様、太めの法量、角ばった断面に古様式の重厚さが残ります。制作年は下降しても中世の様式がこの過渡的造形として貴重な中世轡とします。

さて轡は、馬の頭に結びつけ

た面懸の面連から左右に垂れた大紐を轡の鏡板の頂辺（宝珠文の先）から立ち上がった立間の上端の鐙（壺）に通し四方手に結び、近世になると房助という紐を介して結んで装着します。この轡にも紅花染唐打

の付房の房助が付属しますが、然糸製でこの鞍のものではありません。一方轡の喰は馬の口に喰（か）ませます。喰部分は馬の口腔・舌の動きになじむように、二本の鉄棒を各々の鐙で接続、そこを組違といひ多少の遊（自由さ）のある構造です。

組違の鐙でつながる左右二本の喰の端は大きな喰先の鐙で、鏡板の宝珠を三つ重ねた形（三盛）の下の二つの宝珠の間の二条の合体する豎の輪郭に、堅固に、ゆったりした遊び（余裕）

を以って接続します。その喰先の鐙に、大きな遊鐙（搦輪）が取りつき、その遊鐙に、引手（水付）の金具の鐙（壺）がつきます。左右の引手先の末端にある手綱付壺の鐙に、手綱の左右の端が結びつけられるのです。

轡は騎手の手綱捌きで、鐙は騎手の両足の働きで、馬を制御するための道具です。騎射を主とする中世武士にとって功名手柄、死命を賭して人馬一体となるための大事な武具です。円鐙を介しての遊びのある接続法・法量など、微妙な工夫があつたと考えられます。

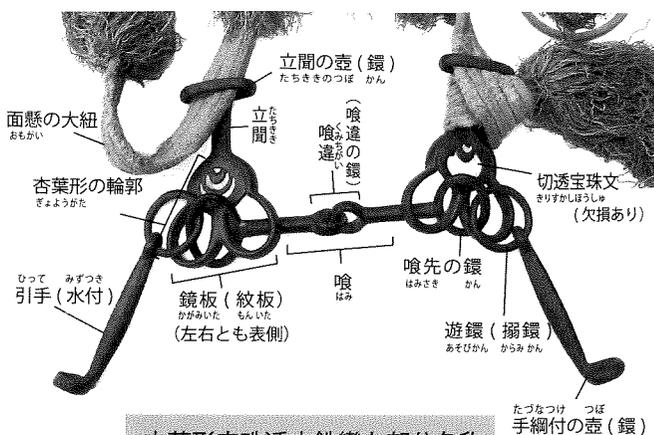
朝廷の牧場の多かつた武蔵国では馬具の製作も行われ、古く『伊勢物語』（十三段）に武蔵鐙の名称がみえ、山上八郎先生のご示教では、多分舌長鐙などに相当するだろうとのことでした。多摩の中古・中世の日野・落川遺跡（多摩川流域の日野市・多摩市）では、馬具の鍛造が行われたことも報告されています。

面懸を結ぶ立間と喰と、手綱のつく引手とを接続するのは鏡板（紋板）です。立間と紋板は古くは別造で、小鏡という部分で割込知とし銜を打ち接続しましたが、御嶽のは共造です。共造の立間と鏡板で長134mm、立間長52mm・幅14mm、小鏡長12mm・厚8.5mm、鏡板の長82mm・幅87mm・厚11.5mm、10mmで立間の断面は厚く長方形です。立間の壺も大きく、角ばつて長方形で古様。外側で長辺61mm・短辺27mm・高9.5mmで、側面に近世に定式化する切目が無いのも古様です。『集古十種』馬具部には、御嶽の鞍鐙と面懸と轡を載せますが、誤つて切目を描いています。

御嶽の轡の共造の立間は、後世のような小鏡の円形はつくらず、幅もかわらず、ただ表側のみに二条線を刻みます。過渡期で、擬制的にその部分を示したのです。御嶽の轡は、小鏡形出現以前の古様を示すと思えます。

さらに鏡板を杏葉形の輪郭と

し、輪郭の底辺で、鍛造してきた左右の輪郭を内側に立ちあげて合わせ、本来は杏葉形にうちひらめて造形すべきなのに、当世風に宝珠の三つ重ね（三盛）の上部に宝珠を宝珠形に造形三筋の切透を加飾したのです。宝珠から連想する密教の荼吉尼天の福德（錢貨・蓄財）信仰は鎌倉末の『源平盛衰記』の清盛説話にみえ、宝珠の形は曼荼羅図に、多摩では立川普濟寺の



杏葉形宝珠透文鉄轡と部分名称  
ぎょようがたほうしゆすかしもんてつくつわ ぶぶんめいしょう

向って右の立間の壺に通した大紐は四方手結び。左右の鏡板は表側を外向きにする。

いで正応六年（一二九三）成  
立で写実性の高い『蒙古襲  
来絵詞』、下っては貞和三年  
（一二三四七）の『後三年合戦絵  
詞』に描写されます。しかし、  
武家の軍陣所用の大和鞍に付属  
する伝世品の例は、この御嶽神  
社の例が唯一なのです。  
伝統的な鏡轡を引向の透彫に  
した例が『後三年合戦絵詞』に  
描かれます。杏葉轡の変形の志  
向もこの頃で、私の考えでは

は、鎌倉中期の『宇  
治物語絵巻』、つ  
いで正応六年（一二九三）成  
立で写実性の高い『蒙古襲  
来絵詞』、下っては貞和三年  
（一二三四七）の『後三年合戦絵  
詞』に描写されます。しかし、  
武家の軍陣所用の大和鞍に付属  
する伝世品の例は、この御嶽神  
社の例が唯一なのです。  
伝統的な鏡轡を引向の透彫に  
した例が『後三年合戦絵詞』に  
描かれます。杏葉轡の変形の志  
向もこの頃で、私の考えでは

は、鎌倉中期の『宇  
治物語絵巻』、つ  
いで正応六年（一二九三）成  
立で写実性の高い『蒙古襲  
来絵詞』、下っては貞和三年  
（一二三四七）の『後三年合戦絵  
詞』に描写されます。しかし、  
武家の軍陣所用の大和鞍に付属  
する伝世品の例は、この御嶽神  
社の例が唯一なのです。  
伝統的な鏡轡を引向の透彫に  
した例が『後三年合戦絵詞』に  
描かれます。杏葉轡の変形の志  
向もこの頃で、私の考えでは

重要文化財、延文  
六年（一三六一）  
造立の六面幢の諸  
天の背景の七宝の  
図に描かれます。  
南北朝時代には普  
及していた信仰的  
な文様と考えま  
す。  
公家の移鞍に所  
用の杏葉轡が、武  
士の戦陣にも専ら  
用いられた様子  
は、鎌倉中期の『宇  
治物語絵巻』、つ

鎌倉後期と想定します。宝珠文  
は、中世には、連銭文と呼ばれ  
た円文の鞍にふさわしい。杏葉  
形の輪郭という中古以来の古典  
的意匠を、中世流行の三盛の輪  
郭意匠に、中に配すべき杏葉文  
を現世的な富貴の如意宝珠文に  
変えたところに、新しい武家の  
志向を印象します。さらに下に  
重なる二つ分の空間に宝珠を配  
さなかったのは、喰先の大きな  
鑲の自在な遊を考慮した実用性  
が想定できます。  
喰は各々の長114mm、中  
ほど最も太く12.5mmで古様。喰違  
の鑲外径3mm、2.8mm、総長は220  
mm。鏡板に組みあう喰先の鑲は  
同じく長径60mm・短径41mmで、  
遊鑲は長径49mm・短径47mmと大  
きい。引手は総長117mm、中ほど  
は鈍豆状にうちひろめ断面角は  
り、厚8mm・最大幅15mmで太く  
形状は古様。遊鑲にとりつく引  
手の鑲は長径22mm・短径20mm、  
厚7~9mm。手綱付の壺の鑲は  
径2.8mm、2.6mm。引手や喰の法量・  
形状には、中世の古様が濃厚で

東京国立博物館蔵で重要美術品  
の『銅造銀杏葉轡』と共通す  
る様式があります。  
奈良の手向山八幡宮、栃木の  
二荒山神社などの古社に公家  
所用の神事の移鞍に付属する  
指定文化財の杏葉轡には伝存  
例があります。しかし前記した  
ように、武家所用の軍陣用の大  
和鞍に付属して伝存する中世の  
杏葉形鉄轡の例は皆無です。こ  
の武蔵御嶽神社が唯一無二の伝  
存遺例です。絵巻物には豊富に  
描かれながら、実遺例はないの  
です。  
変形杏葉轡ではあっても大変  
に貴重です。またそれが中世の  
変形杏葉轡としても唯一例なの  
ですから一層貴重と思います。  
馬具の調査は長期にわたります  
した。年代設定をこころみた旧  
師山上八郎先生や恩師の山岸  
素夫先生と同行の折も得まし  
た。このたびは、同じ山岸先生  
門下で西岡文夫氏・寺本靖氏、  
また古馬具の実際に精通した菅  
野茂雄氏にご助力を頂きました。

神社の社(四十五)

ホトトギスおばあちゃん

片柳 茂生

春、それは躍動する季節です。樹々は地中から水を得、若葉を広げ、虫は地中より這いだし、南の島々から子育てのために鳥はやって来る。

春は自然界で一番賑やかな季節を迎えます。南方からは様々な野鳥がやって来ます。クロツグミ・オオルリ・キビタキ……。そんな中で一番最後に御岳山に来るのがホトトギスです。そんなホトトギスの逸話を一つ……。もう十何年も前の話です。五月の連休を過ぎると決まって、「もうホトトギスは来ましたか？」という電話の問い合わせがビクターセンターに来ます。それも毎年の事です。電話の主は



イラスト：紺野美織

誰だか解りません。ただ品のあるおばあちゃんの声なのです。「はい、何日前に声を聞きました」と答えると、その数日後に老夫婦がビクターセンターに来るのです。そして、「ホトトギスの声を聞きました。有難うございます。」と言って帰って行くのです。そんな事が何年続いたでしょう。毎年訪れるようになったその老夫婦は、今では私たちにとって忘れられない存在になっていました。そんな老夫婦の事をいつの間にかホトトギスおばあちゃんと呼ぶようになってたのです。

ところが、ある年からホトトギスおばあちゃんの電話が来なくなりました。何かあったのでは？と感じました。

そして三年が経ち、再びホトトギスおばあちゃんからの問い合わせの電話が来ました。ご無事でお過ごされたのだと安心しました。しかしその年、ビクターセンターに来たのはおばあちゃん一人でした。旦那さんは亡くなられ、その後気落ちしてあまり外に出たくなかったのだそうです。でもそれではいけないと思ひ直し、旦那さんの好きだった

ホトトギスの声をもう一度聞こうと御岳山に来たのだそうです。

その二年後ホトトギスおばあちゃんは、一冊の本を携えてビクターセンターにやって来ました。ご夫婦の今までに詠んだ俳句の句集だったのです。その時初めて知りました。老夫婦は御岳山で聞いたホトトギスの句を創りたくて毎年やって来たのだと。そんなおばあちゃんも、その年を限りに訪れる事はなくなりました。

毎年、ホトトギスの声を聞くとおばあちゃんの顔が今でも思ひ浮かんでくるのです。

ケーブルカー全面運休

2016年(平成28年)1月18日(月)から3月末までケーブルカーの巻上設備の更新工事により、全面運休となります。ケーブルカーの安心運行の要である機器で、前回更新を行った平成9年から17年ぶりの工事となり、現在各鉄道会社で採用されているインバーター方式に更新されます。

ご参拝の皆様には大変ご不便、ご迷惑をおかけ致しますが、ご理解賜りますようお願い申し上げます。



表紙写真 鶴巻育子

「奥の院への道」

奥の院までの道のり。秋の優しい太陽の光が色づく葉っぱを照らしキラキラと輝く光景は、秋の御岳山の宝物です。

あとがき

今号でご紹介した写真家・鶴巻育子さんの写真とコラムを春号において連載致します。美しい御岳山の風景をお楽しみに。多摩湖町御嶽講清水様 鶴巻育子様、齋藤慎一先生、玉稿をありがとうございました。

平成二十七年 九月二十九日発行

〔年十二回発行・非売品〕

編集 武蔵御嶽神社

TEL 〇四六(七)八五〇〇

FAX 〇四六(七)九七四一

http://www.musashimitatejinja.jp/

印刷 (株)成和印刷